

## 『菊と刀』再考 パートⅡ

A Reconsideration of *The Chrysanthemum and the Sword*, Part Two

### ダグラス・ラミス

- ① 何故今か
- ② 弱点にも関わらず、どのように『菊と刀』は有効だったのか
- ③ 敗戦にまさに最適な国
- ④ 型はどこから来たのか
- ⑤ 政府のイデオロギー
- ⑥ 市井の人

#### 【論文要旨】

ルース・ベネディクトの『菊と刀』が社会学の研究書として徹底的な批判を受けているにもかかわらず、戦後の日本研究に極めて大きな影響を与えたのはなぜか。答えは、この本はとても役に立った、ということだ。それは、日本社会を正確に描写したためではなく、戦後の日米力関係に合ったような日本研究（あるいは日米研究）の枠組みを提供したから役に立ったのである。またナチズムによって評判が悪くなった人種差別の代わりに、もっとやさしい差別（リベラリストでも利用できる差別）つまり文化差別を提供したからである。

そういう意味で『菊と刀』は研究書ではなく、一種の政治文学である。政治的なメッセージが第一の目的であって、日本社会の描写は手段である以上、その描写は適当に歪められるのは当然であるといえる。しかしこの歪められた描写の由来は単一のものではない。それぞれの元を整理すると次のようになる。

- 1) 西洋人の伝統的なアジアへのステレオタイプ(オリエンタリズム)。サイード (Edward Said) の『オリエンタリズム』はヨーロッパから東方へのまなざしでアジアをどう見たかという研究だが、『菊と刀』はアメリカから西方へのまなざしでアジアを見るオリエンタリズムの古典である。
- 2) その歴史的な瞬間。『菊と刀』は戦勝国の敗戦国の視点になっている。
- 3) ルース・ベネディクトの個人的なものの考え方。
- 4) 1945年以前の日本政府、ことに軍国主義時代に促進されたイデオロギー。
- 5) 3) と 4) の間の媒介。つまり、ベネディクトの主な情報提供者。

この論文は主に上の4)と5)に触れる。特にベネディクトの情報提供者ロバート・ハシマの最近のインタビューから得た情報を紹介する。

キーワード：ルース・ベネディクト、日本学史、勝利者の人類学、文化差別、ロバート・ハシマ